講義５　生息密度モニタリングの精度と捕獲事業への活用

株式会社　野生動物保護管理事務所
計画策定支援室　岸本康誉

１．各種計画の目的と必要なモニタリング
　①　計画によって評価すべき項目は異なる。まずは、第二種管理計画、指定管理鳥獣捕獲等事業実施計画の目的と、何を評価すべきかを整理する必要がある。
　②　PDCA の中で各種計画の目的と評価項目を整理する。上記、二計画は階層的な関係として整理できる。
２．対象期間や対象範囲などのスケールによる評価項目の考え方
　①　計画とスケールとの関係を再整理する
　②　対象とする範囲や期間によって評価する（できる）項目は違う
３．生息密度に関するモニタリング方法と推定方法
　①　モニタリング方法と分析方法は分けて考える。生息密度やその動向の把握はモニタリングと分析方法の組み合わせで行う。
　②　各種モニタリング手法とその特徴を把握する。
　③　各種分析手法とその特徴を把握する。
４．精度と各種手法の適用範囲
　①　推定精度とは何か。推定幅は推定精度の一つの指標。
　②　モニタリングの種類や蓄積年数による精度の違い
　③　適用範囲を考える。分析手法の適用の限界を知っておく。
５．必要な調査努力量やモニタリングの設計
　①　偏りのないサンプリング計画を。特に広域では網羅的な状況把握や管理目標設定に必須。
　②　基本は浅く広く継続的に。データの粗さは分析で考慮できるが、データが無いと精度の高い評価は困難。
　③　どれくらい調査努力量が必要か。調査努力量と観測データのばらつきとの関係や、他地域での実績からは判断する。
　④　モニタリング方法を変えるべきか。継続した手法であっても、変えた方が良いことがある。
６．目標の設定と事業評価
　①　管理目標と捕獲目標は分けて考える。
　②　管理目標をどのように設定するのか。また、どのようにそれを評価するか。
　③　捕獲目標をどのように設定するのか。対象とする範囲によって設定方法を変えないといけないことがある。また、どのようにそれを評価するか。